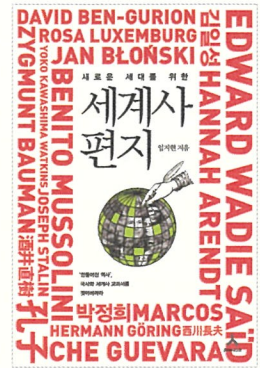


トランスナショナル・ヒストリーのために
 ——林志弦著『新しい世代のための世界史手紙』

バク・ジョンラン
 朴貞蘭



今回、ここに紹介するのは、歴史学者・林志弦氏の『新しい世代のための世界史手紙』（ヒューマニスト・ソウル、2010年）である。まず、本書の構成と著者のプロフィールを挙げておく。以下、引用など本書の記載事項は、筆者が翻訳した。

【目次】

プロローグ—歴史教科書を破り捨てる！

1. 「東洋」と「西洋」、その二分法の解体のために—エドワード・サイード宛
2. 東アジアの民族主義、その敵対的共犯者ら—酒井直樹宛
3. 植民主義、ナチズム、そしてホロコースト—ヘルマン・ゲーリング宛
4. 死んだ孔子が生きているアジアを食べてしまう—孔子宛
5. ファシズムと植民地マルクス主義の歴史的「解憂」—ベニート・ムッソリーニ宛
6. 労働解放から人民動員へ—ヨシフ・スターリン
7. 歴史の「主体」は、あなたなのか、民衆なのか—金日成宛
8. 「漢江の奇跡」、大衆の欲望と独裁のあいだ—朴正熙宛
9. 不穏なマルクス主義のために—ローザ・ルクセンブルク宛 その1
10. 日常とドグマのあいだで—ローザ・ルクセンブルク宛 その2
11. 不可能を夢見る、若しくは夢の不可能性—チェ・ゲバラ宛
12. 権力の掌握は革命の失敗である—マルコス宛

13. シオニズム、ホロコースト、イスラエル国家主義—ダヴィド・ベン＝グリオン宛
14. 我々も悪魔になれる：悪の平凡さ—ハンナ・アーレント宛
15. 近代は野蛮である：悪の合理性—ジグムント・バウマン宛
16. 犠牲の記憶が呑み込んでしまった加害の記憶—ヨーコ・カワシマ・ワートキンス宛
17. 司法的な無罪と道徳的な罪意識—ヤン・ブロンスキ宛
18. 文化は国境がない—西川長夫宛
19. 国境を超える歴史的想像力のために—韓・中・日の同僚市民宛

エピローグ

—今、自分が立っているその場所から探り出せ

◎著者プロフィール

林志弦（イム・ジヒョン）

韓国・漢陽大学校史学科教授、比較歴史文化研究所所長。日本語による主要な業績として「六八年革命と朝鮮半島」（『環』33号、藤原書店、2008）、『『世襲的犠牲者』意識と脱植民主義の歴史学』（三谷博・金泰昌編『東アジア歴史対話 国境と世代を超えて』東京大学出版会、2007）、編著として『植民地近代の視座—朝鮮と日本—』（岩波書店、2004）がある。なお、韓国語による主要業績は、『民族主義は、反逆である』（『민족주의는 반역이다』ソナム、1999）、『傲慢と偏見』（『오만과 편견』共著、ヒューマニスト、2003）、『敵対的共犯者たち』（『적대적 공범자들』ソナム、2005）、『大衆独裁』1～3（シリーズ『대중독재』編著、チェックサン、2004～2007）などがある。

1 歴史教科書を破り捨てる！

学問と国境の枠を飛び越えるトランスナショナル歴史学者として知られる林志弦氏は、その著書やインタビュー記事における先鋭的な発言¹のため、韓国で最も注目を浴びる研究者の1人である。なぜなら、彼が主張する「脱民族主義」「トランスナショナル」などの諸概念は、民族や国家・国民という言葉を好む韓国社会の通念に対して異和をもたらすものだからだ。

林志弦氏は、1999年の著書『民族主義は反逆である』²において、韓国の戦後世代が持つ植民地という過去に対する考え方は、国家権力により作られた「世襲的犠牲者意識」であるとした。その上、この世襲的な犠牲者意識は、植民地世代が経験した苦痛を担保に、戦後世代が容易く免罪符を獲得する根拠として作用していると指摘し、韓国社会における「民族主義」の問題を正面から批判した。以後、「脱民族主義」と共に近代における国民(民族)国家体制の問題に注目し、「犠牲者意識ナショナリズム」や「大衆独裁」³といった挑発的な概念を展開した。こうした概念は、反論・再反論を繰り返しながら、韓国の歴史学研究において無視することのできない言説として位置づけられてきた。

本書『新しい世代のための世界史手紙』は、2000年から10年間、韓国の教育雑誌である『우리교육』⁴に連載した「歴史エッセイ」を修正・加筆したものであるが、当初は、娘に送る手紙だったこの歴史エッセイは、今回の出版にあたって、その宛先が変更された。エドワード・サイード、ヘルマン・ゲーリング、ベニート・ムッソリーニ、ヨシフ・スターリン、金日成(キム・イルソン)、朴正熙(パク・ジョンヒ)、ローザ・ルクセンブルク、ハンナ・アーレントなど、世界史に名を残す歴史的人物18人に送る手紙として再構成された。こうした構成について、著者は、「解体の戦略としては、ヴァルター・ベンヤミン(Walter Benjamin)が提示した逸話(anecdote)的な歴史叙述を取り入れた」⁵と述べているが、様々な物語を投げかけるこの逸話的な手紙は、公式的な歴史叙述が構築した精巧な因果関係を壊すために最も効果的な手段であるといえよう。

本書は、東洋と西洋、帝国と植民地、民族と人種など、歴史学研究において主流であった二項対立が規定してきたすべての境界と区分を乗り越えることを提案してい

る。権力が作ってきた20世紀に強要された歴史と意識を克服し、新しい歴史を創造すること。最後の19番目の手紙は、「ナショナル・ヒストリー」の枠から離れ、「トランスナショナル・ヒストリー」を志向する研究者として、日本・中国・韓国の市民に、国境と辺境に対する認識の想像力を求めている。

このように、今までの教科書的な歴史叙述を、内容のみならず形式においても解体しようとする戦略で構成された本書は、「ナショナリズム、ファシズム、植民主義、ホロコースト」など、20世紀の暗い歴史的遺産と決別し、読者それぞれが、今までの歴史教科書を破り捨て、「自分の歴史」を創造できるように、歴史的想像力を読者に喚起させるユニークな世界史の手紙の束なのである。

2 「犠牲者意識ナショナリズム」

本書が刊行された2010年6月に、名古屋大学MCJC主催で林志弦氏の講演会があった。手紙の中で投げかけられていた歴史的な逸話の幾つかを、筆者は本人の声を通じて直接拝聴することができた。講演では、まず、1990年代の歴史学研究におけるメモリーブーム(memory boom)が、単なる「記憶」ではなく、「犠牲」の記憶を中心に起きたため、「犠牲」に関する記憶研究が、歴史学における民族主義的な歴史叙述を正当化してきたと述べた。また、こうした「犠牲」の記憶は、他者を排除し民族内部の記憶としてのみ伝承する「記憶の神聖化(sacralization of memories)」の問題につながると指摘した。その他、第2次世界大戦以後に見られる「集団的有罪(collective guilty)」や「集団的無罪(collective innocence)」などといった歴史認識が、各国における「犠牲者意識ナショナリズム」をより強化してきたとするなど、自国の優越を強調・強要し、それを記憶させる教科書的な歴史認識や歴史叙述を明瞭に批判した。

講演のタイトルにある「犠牲者意識ナショナリズム」とは、ジグムント・バウマン(Zygmunt Bauman)の「世襲的犠牲者意識(hereditary victimhood)」⁶に基づいた用語で、戦後、「歴史的犠牲者」という集団的な自己認識が、どのようにナショナリズムを強化してきたかを指摘できる概念である。「脱民族主義」研究の延長線にある「犠牲者意識ナショナリズム」研究は、講演

の中でも明かしたように⁷、これからも多様な角度から批判・論議が必要であろう。

林志弦氏の『新しい世代のための世界史手紙』やMCJC主催の講演の底辺にあるテーマは、トランスナショナリズムである。このトランスナショナリズムは、まさに「自己否定を通じた理論の再定立や認識の拡張の過程において、生まれた代案としての問題意識」⁸であろう。西欧において、トランスナショナル・ヒストリーが登場したのは、1970年代。これは、第2次世界大戦として象徴される民族主義的な歴史観に対する反省からスタートした。トランスナショナリズムが、人文社会学の全般において広まったのは1990年代であったが、それは、このトランスナショナル・ヒストリーが、現在における人種や民族など葛藤を解決するキーワードになると期待されたからであった。

過去の歴史認識から脱出し、日常とイデオロギーの衝突・交差する場所(エピローグでは、「今、自分が立っているその場所から探り出せ」)から、現在における問題を解決できる糸口を探ること、それが、林志弦氏からのメッセージであろう。こうした手紙が、多くの東アジアの市民に届けられ、それぞれの歴史的な想像力を発揮し、自国史のカノンを乗り越えるその日が来ることを祈りたい⁹。なお、今回の講演に取り上げた「犠牲者意識ナショナリズム」に関する林志弦氏のプロジェクトは、韓国で『犠牲者意識民族主義』というタイトルで出版される予定があると聞いている。

(『새로운 세대를 위한 세계사 편지』 휴머니스트, 2010年6月14日, 389頁)

1

独島(竹島)を「我が領土」とする主張は、非歴史的である。近代以前の独島は、辺境地域として存在していた。近代的な国境の概念を乗り越えるべきである。インタビュー「韓日における「独島は固有の我が領土」主張は、非歴史的」『미디어 오늘』(メディア今日)2005年4月29日付。<http://www.mediatoday.co.kr/news/articleView.html?idxno=36521>。「ヨーコ物語」に対する「集団的な怒り」や在米コリアンのチョ・スンヒによる銃撃事件に関する「罪意識」、インタビュー「民主化」以後の世相を夢見る」『朝鮮日報』2007年6月29日付。

2

戦後世代が植民地の過去に対する考え方は、国家権力により作られた「世襲的犠牲者意識」であり、これは、植民地世代が経験した苦痛を担保に朝鮮半島の戦後世代が容易く免罪符を獲得する根拠として作用していると指摘した。また、これは、韓国の国家主義的なナショナリズムの性格をより強化させると説明している。『民族主義は反逆である』ソナム・ソウル, 1999年。

3

大衆独裁:「ナチズム、ファシズム、スターリン主義、日本の翼賛体制、朴正熙の開発独裁、主体(チュチェ)思想などといった20世紀の独裁体制—左派独裁・右派独裁関係なく—は、上からの少数独裁ではなく、下からの大衆の「自発的な動員体制」に基づいた大衆独裁体制を志向したとする独裁研究の新しいパラダイム」Jie-Hyun Lim and Karen Petrone eds., *Gender Politics and Mass Dictatorship: Global Perspectives* (London: Palgrave, 2010) 参照。

4

『우리교육』(私たちの教育)ウリ教育出版・ソウル。<http://www.uriedu.co.kr/main/magazine.asp>

5

林志弦「プロローグ」『新しい世代のための世界史手紙』ヒューマニスト, 4頁。

6

世襲的犠牲者意識(hereditary victimhood):「ジェノサイドや植民主義における暴力など、歴史的に集団的苦痛を経験した国家において、以後の世代が先祖の苦痛を世襲し、自分たちも犠牲者と思わず集団的な意識状態。ホロコーストを記憶するイスラエルの戦後世代や植民主義における暴力を記憶する韓国の戦後世代においてよく見られる」Zygmunt Bauman, *Modernity and the Holocaust* (Cambridge: Polity Press, 1989) 参照。

7

講演の最初に、「犠牲者意識ナショナリズム」について、これはまだ作業仮説(work hypothesis)の段階で、これから多くの批判や論議が必要であるとした。

8

「林志弦教授「国境に閉ざされた国史パラダイムを壊すべき」」『ギョヒン新聞』2010年6月24日付。

9

東アジアにおける国史を放棄すべきであるとする林志弦氏を批判する側は、「国史」を解体した後の代案がないと指摘する(「国史解体に関して、現実的に説得力が低い。強豪国がナショナリズムを先に放棄しない限り、ただの理想論に過ぎない。弱者が鎧を先に脱ぐことができないように、まだ、民族主義の放棄を言う段階ではない。民族主義のあいだで、その「電圧」を合わせ、国家間の衝突を防ぐ意味としての「開かれた民族主義」、これこそが現実と理想を癒す選択である」、ホ・ドンヒョン「現実的な代案は、「開かれた民族主義」のみ」『中央日報』2006年3月18日付)。しかし、「トランスナショナル空間において、ナショナル・ヒストリーを批判し、同時多発的に戦っていくべきである」とする林志弦氏の提案は、むしろ明確である。なお、日本・中国・韓国の三國で論議されている「東アジア共同歴史教科書」に対しても批判的な立場に立つ林志弦氏は、「共同歴史教科書は、必要ではなく、逆に非常に危険である」とした上で、「歴史は、多様な解釈に対して、開かれて、互いに、異なる解釈と理解が共存することが当然のことである」とした(前掲、『ギョヒン新聞』2010年6月24日付)。